

# コラール 創造する歌

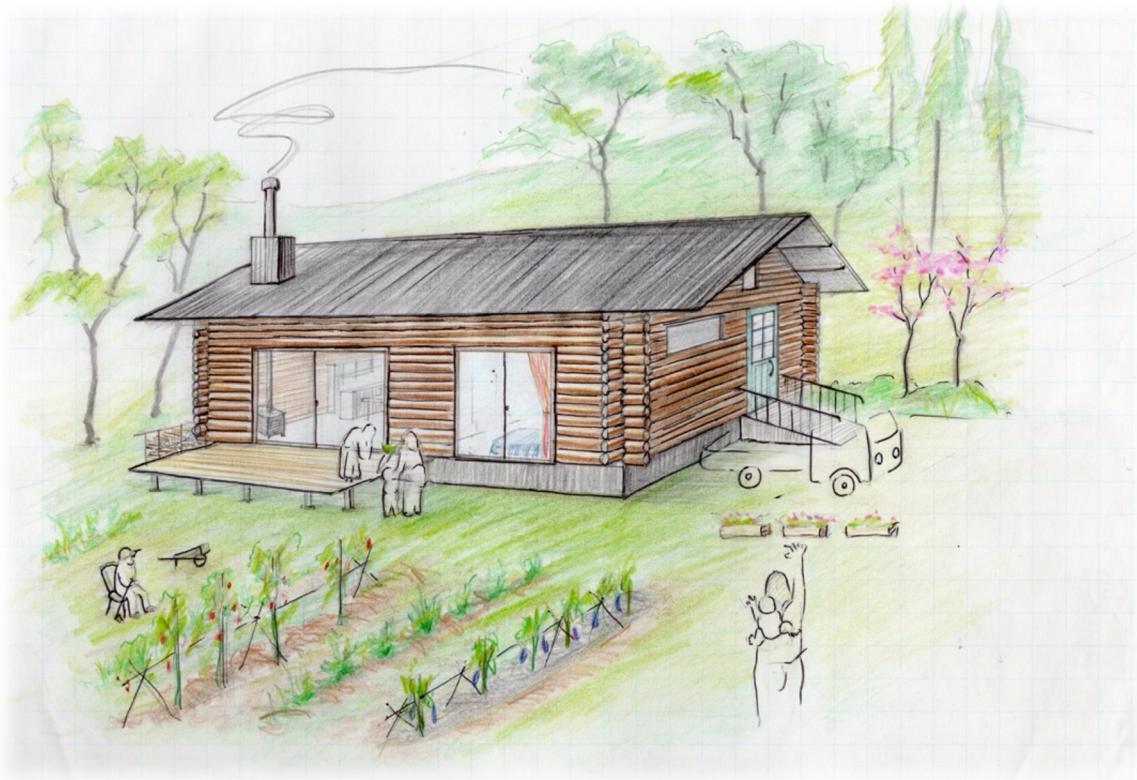
10月17日 (土)  
13:30開場 14:00開演

能登半島 町野町ログキャビンプロジェクト支援

山下稜 チャリティーコンサート

山下 稜 (テノール)  
大橋 亜矢 (オルガン)

## 能登半島 「町野町ログキャビンプロジェクト」について



### 「家 建てっぞー」

輪島市の東部地区の町野町は人口2000人ほどの小さな集落である。

壇ノ浦の戦いで敗れて能登に流れ着いた平時忠の子孫である時国家が一次産業を中心にこの地を繁栄させ、北前船によって全国を行き来していた。そののちも海や山の地形を利用して協力協働の営みが継続され、住民は大変穏やかな田園風景が広がる地域を愛し生活していた。

しかし、2024年1月の能登半島地震と9月の洪水により、これまでの人の絆が分断され協力協働の営みが途絶える。いったんどん底を見た住民がここからどう立ち上がり、能登人としての絆を再構築し、長い歴史の中で困難を乗り越えてきた自主自立の精神をどう行動力につなげるかが問われた。

その活動の一步一步が、意欲と自信を甦らせ、本来の健康的な生活を取り戻すことができるものとする。このことが実現して初めて心の復興とも言える。

(「家 建てっぞープロジェクト Web ページより」)

\*このプロジェクトは、ルターによる「コラール」の復興と同じように民衆の心が起こされて行くプロジェクトだと思います。彼らのうちに起こされた思いが神さまの助けによって実現しますように、祈りをもって支えたいと思います。

## 主を讃美するために民は創造された。詩編 102 編 19 節

日本福音ルーテルなごや希望教会  
牧師 末竹 十大

わたしの  
いのちは  
なんのため

わからないけど  
生きている

人に何を言われても  
自分でダメだと思っても  
わからないけど  
生きている

だれかが  
わたしを  
生かしてる

わからないけど  
生かしてる

生かされ 生まれ  
生かされ 死んで  
生かすお方を  
讃美する

生きてるわたしが  
讃美する  
創ったお方を  
喜んで

「主を讃美する」ということは、神さまを誉め称えることです。わたしたちが生きるということは、創ったお方がおられて、そのお方に感謝し、創られたことを喜び、創ったお方を讃えることなのです。

わたしたち人間は、自分が何者かであることを誇ることができるならば、神さまを讃美するということもあるかも知れません。しかし、苦しみの中で主を讃美することはないでしょう。主を讃美するということは、わたしが何者かになって讃美するのではないのです。何者でもなくても生かされていることを讃美するのです。苦難の中に置かれていても讃美するのです。このような信仰の歌が讃美歌です。

生きていく力は神さまの力に信頼する心から生まれて来ます。

みなさまがコンサートを通して、讃美する心に満たされていきますように。

# 第一部「コラールの発展」

第一部解説：伊藤 節彦 牧師  
日本福音ルーテル栄光教会

## *Gregorian Chant* グレゴリオ聖歌

### *Veni Redemptor Gentium* (来たれ異邦人の救い主)

この曲はとても古い教会の歌です。

今日のコンサートには「コラール、創造する歌」という題をつけました。「コラール」という言葉は、簡単に言えば、宗教改革以後、とりわけルターの教会で、会衆自身が自分たちのことばで歌ってきた讃美の歌です。

けれども、教会の歌がルターから始まったわけではありません。今お聴きいただいたようなグレゴリオ聖歌には、それ以前の教会が大切にしていた信仰の姿がよく表れています。

## *Martin Luther* マルティン・ルター

### *Ein neues Lied wir heben an* (新しい歌を、歌いはじめよう)

1523 年、ブリュッセルで、ルターと同じアウグスティヌス会に属していた二人の若い修道士が、宗教改革の信仰を捨てなかったために火刑に処せられる出来事が起こります。その知らせは、ルターに大きな衝撃を与えました。この出来事を聞いて、ルターはただ悲しむだけではありませんでした。詩編にある「新しい歌を主に向かって歌え」(詩編 33:3) ということばが、ルターの中で動き始め、歌となって誕生したのです。

### *Ein feste Burg ist unser Gott* (神はわがやぐら)

ルターの歌の中では、もっともよく知られている歌かもしれません。旋律も力強いので、「宗教改革の戦いの歌」として受け取られてきた歴史があります。けれども、この歌をよく理解するためには 1 節と 2 節の対照的な言葉がとても大切です。

1 節では「われらのみ神は、堅い城、力」と歌います。ところが 2 節になると「われらの力は、弱くて空しい」と歌うのです。もとのことばは「私たち自身の力では、何もしえぬ。」となっています。私たちの生が、誰によって支えられているのかを歌う歌なのです。

今日のチャリティーについても、同じことを考えさせられます。支援とは、被災地を「支援する人」と「支援される人」に分けて、私たちが何かをしてあげるというものではありません。私たち一人ひとりにできることには限りがあります。だからこそ、それぞれが自分にできるものを差し出し、人と人とが支え合う。そこに神さまの力が働くのです。

*Johann Sebastian Bach* ヨハン・セバスチャン・バッハ

*Zion hört die Wächter singen* (BWV140 《目覚めよ、と呼ぶ声あり》より)

バッハは、ルターのコラールを単なる作曲の素材として使ったわけではありません。ルターがことばと歌によって語った信仰を受け取り、それを音楽そのものによって表現した作曲家だと言えるでしょう。

ルターにとっては、「神のみことばを語ること」と「歌うこと」は切り離すことのできないものでした。バッハは、その伝統をさらに大きく広げました。ことばの意味を、旋律や和声、声と楽器との組み合わせによって響かせる。言葉だけでは伝えきれない信仰の世界を、音楽が語り始めるのです。

*Jakob Ludwig Felix Mendelssohn Bartholdy* フェリックス・メンデルスゾーン

*Dann werden die Gerechten leuchten* (オラトリオ《Elias》より「正しい者たちは輝き」)

*Sei getreu bis in den Tod* (オラトリオ《Paulus》より「死に至るまで忠実であれ」)

メンデルスゾーンは1829年、バッハの「マタイ受難曲」を演奏し、それが19世紀にバッハの音楽が広く見直されていく大きな契機となりました。バッハの音楽も、いつの時代にも同じように人気があったわけではありません。音楽には流行があります。その時代には新しく魅力的に聞こえたものが、やがて忘れられていくこともあります。しかし、時代が変わっても、もう一度人の心に届くものがある。メンデルスゾーンによるバッハの蘇演は、音楽の一時的なトレンドを越えて、人間に語りかけ続けるものがあることを示した出来事でもあったと思います。

最初は「エリヤ」から、「正しい者たちは輝き」です。預言者エリヤの長い物語の終わり近くで、「正しい者たちは、父の国で太陽のように輝く」という聖書のことばが歌われます。目の前に見えている現実だけがすべてではない。その先にある神の約束に目を向ける歌です。

そしてもう一曲は、「パウロ」から、「死に至るまで忠実であれ」です。信仰とは、苦しみに遭わないことではありません。苦しみのただ中であっても、なお神によって支えられて生きることなのです。

**みんなで讃美歌**

**まぶねの中に** (作詞：由木康、作曲：安部正義)

教会の歌は、優れた歌手の歌を聴いて終わるものではありません。そこにいる人々自身が歌う。それがコラールの大切なところでした。

最後は、皆さんにも歌う側に加わっていただきたいと思います。今日一緒に歌うのは、日本で生まれた讃美歌「まぶねの中に」です。

この歌を貫いている一つのことばを挙げるとすれば、「この人を見よ」ということばではないでしょうか。馬槽（まぶね）に生まれた人。貧しい者の中に身を置いた人。人々と共に歩き、人の痛みを負い、十字架へと向かった人。この人を見よ。と、ご一緒に主を讃美しましょう。

# 307

あがない

救い

まぶねの中に  
由木康, 1896-

MABUNE  
安部正義, 1891-1974

まぶねの なかに うぶごえ あげ  
たくみの いえに ひととなりて  
まずしき うれい いくる なやみ  
つぶさになめし このひとを みよ

1. まぶねの中に うぶ声あげ  
大工の家に 人となりて  
貧しきうれい 生くるなやみ  
つぶさになめし この人を見よ。

2. 食するひまも うちわすれて  
しいたげられし 人をたずね  
友なきものの 友となりて  
心くだきし この人を見よ。

3. すべてのものを 与えしすえ  
死のほかなにも 報いられで  
十字架の上に あげられつつ  
敵をゆるしし この人を見よ。

4. この人を見よ、この人にぞ  
こよなき愛は あらわれたる、  
この人を見よ、この人こそ  
人となりたる 活ける神なれ。

## 第二部 「歌う喜び」



山下稜さん選曲による歌う喜びをお楽しみください。

*Amazing Grace*

作詞者 John Newton

作曲者 不詳

*Hymne à l'amour*

作詞者 Édith Piaf

作曲者 Margrite Monnot

*You raise me up*

作詞者 Brendan Graham

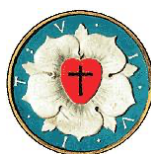
作曲者 Rolf Løvland

グループ名: Secret Garden

*Time to say goodbye*

作詞者 Lucio Quarantotto

作曲者 Francesco Sartori



**Sola Fide**

**Sola Gratia**

**Sola Scriptura**

---

## 山下 稜 (テノール)

愛知県立芸術大学音楽学部声学専攻卒業。

声楽の演奏にとどまらず、舞台役者や演出助手としても様々な舞台に携わり、幅広く経験を積む。

現在は芸術活動の一線を退き、大切なパートナーの専属ナイトとして奮闘中。

礼拝での賛美が毎週の楽しみです。

## 大橋 亜矢 (オルガン)

刈谷市在住。

名古屋芸術大学音楽学部声楽科卒業。

3歳からピアノを始め、声楽を少し、エレクトーンをしぶしぶ習い始めたところ沼にはまる。元ヤマハシステム講師。こどものためのコンサート企画、イベント会場での演奏などでクラシック以外にミュージカルや映画音楽などいろいろなジャンルの演奏をしています。エレクトーンでオーケストラの曲を弾いているのが幸せです。